

## 中期ハイデガー研究 (2)

# 「世界像の時代」と「技術への問い」をつなぐもの

鎌 田 学  
Manabu KAMATA

### はじめに

絵画 (Bild) を見るということは、どのような経験であろうか。

たとえば、ミレーの『落ち穂拾い』(1857年)。その絵の中にひとは何を見ているのだろうか。ある人は、当時のフランス農村社会における階級格差を見て取るかもしれない。収穫を終えた畑に無造作に散らばっている無数の穂、腰を極端にかがめ、無口に懸命にそれらを拾う三人の女性。ここに、階級格差の中に隠れているもう一つの男女間格差を見るひともいよう。あるいはまた、旧約聖書「ルツ記」における記述を絵の中に読み込み、敬虔な信仰篤き女性の姿を見るものもいるだろう。

この場合、経験として考えられることは、絵画を通して、われわれが現実を理解し把握する態度、あるいは構えとでもいったものである。『落ち穂拾い』を見ることの内には、格差であれ信仰であれ現実の有り様をそうしたものとして捉える働きがひそんでいる。

このように考えるならば、数多くのすぐれた絵画作品を見ることは、われわれがその時々の現実の有り様について知り、知の地平を拡げる行為と言えよう<sup>1</sup>。

さて、本論が取り上げる、1938年に行われた講演「形而上学による近世世界像の基礎づけ」を原型とする「世界像の時代」は、絵画、像として把握された限りでの世界と「近世の学」との必然的なつながりを主題とする重要な論考である<sup>2</sup>。それは「世界像」—学モデルと名づけられ得るもので、先にふれた、絵画を見るというわれわれの日常の経験、つまり個々の絵画に基づいて現実を理解する仕方とは根本的に異なる。後者は、或る像

によって現実を知るが、前者は現実世界を像にすることで現実世界を掌握し統制しようとする。ハイデガーの言い分は次の通りである。「近世の学」は、像として「世界」を把握する。その結果、近世において学が「研究 (Forschung)」になりはて、人間が「一切の事物を算定し、計画し、飼育する無制限な力を賭ける」<sup>3</sup>。「研究」としての学は、近世が「驀進する諸軌道の一つ」<sup>4</sup>である。

「学」と「近世」との本質的連関についてのハイデガーの論断の背後には、彼独自の「表象」論がある。これと後年の「技術への問い」(1953年)との非連続・連続を精査することで、中期ハイデガーの哲学がどのような境位にあるのかを見定めたい。

- 1 「近世」という時代
- 2 「近世の学」の学論
- 3 「世界—像」
- 4 「表象」から「集立」へ
- 5 結語—「目に見えない影」

### 1 「近世」という時代

「近世」という時代を特徴づける際、ハイデガーが第一に問うのは「近世の学」であるが、これ以外にも「近世の本質的諸現象の一部をなす」ものとして以下の諸点が指摘される。「機械技術」、「芸術が美学の視圏へと接近するという経過」、「人間の営みが文化として把握され遂行される」点、そして「神の不在」である。これら四つの論点については詳論されず単なる言及にとどまっているが、しかし本論第4節との関連から「機械技術」についてのハイデガーの短いコメントだけは拾っておこう。

「機械技術を近世的な数学的自然科学の実践へ

の単なる適用と誤解してはならない。機械技術はそれ自身、はじめて数学的自然科学の利用を要求する程度にまで、「機械技術の」実践が自立的に変化したものである。<sup>5</sup>

ハイデガーによれば、「機械技術」はそれ自身自立的なものであって、「数学的自然科学」への単なる適応あるいは応用としては考えられない。ここでいわば、「技術の自立説」が説かれていると理解し得るだろう。しかも、ハイデガーは「近世的技術の本質は、近世的形而上学の本質と同一のものである。」<sup>6</sup>と仰うことで、「近世的技術」もまた、「近世の学」と同様に「形而上学」へと遡って追究されなければならないと指摘する。この「技術の自立説」と後年の「技術への問い」の中の主張とでは、思考の枠組みが大きく違うため、単純に両者を同一化できないのは当然だ。しかし、それにもかかわらず両者をつなぐ糸として解釈できるのではあるまいか。この点については本論第4節で主題的に取り上げる。

## 2 「近世の学」の学論

「近世の学」の本質をめぐるハイデガーの議論は以下のように展開する。

「今日、ひとが学と名づけているものの本質は、研究である。」<sup>7</sup>そうした上で、ハイデガーは「研究の本質」を三つの性格すなわち「段取り (Vorgehen)」「手順 (Verfahren)」と「企業 (Betrieb)」に分け、さらに「段取り」が「企投」と「厳密さ」によって可能となる旨論じる。

本節では「段取り」「企投」と「厳密さ」の概念についてまず検討したい。

「研究の本質は、認識することそれ自身が、自然であれ歴史であれ、存在者のある領域の中に段取りとして設定されるという点にある。段取りは、ここではただ方法、手順しか指さないのではない。というのは、いかなる段取りも、それが動く或る開いた領域をすでに必要としているからである。しかも、そうした領域が開かれてあることこそ、研究の根本の経過である。」<sup>8</sup>

研究なるもの、まずこの「段取り」が存在者の領域の中に置かれることで始まる。ただし、それが実行されるのは、「存在者の或る領域、たとえば自然の中に、自然諸経過の或る特定の見取り図

が企投されることによって」<sup>9</sup>である。

また「企投」は、同時に研究に「厳密さ」を与える。なぜなら、「企投は、認識しつつ段取りをつけることが、いかなる仕方で己を開かれた範囲に束縛しなければいけないかを予め描く」<sup>10</sup>からである。

研究をその対象領域へ束縛することが「厳密さ」ということである。

「学が研究になるのは企投によってであり、企投を段取りの厳密さにおいて保証することによってである。」<sup>11</sup>

次に、第二の性格である「手順」について。

「企投と厳密さが本来のそれらの姿へと初めて展開するのは、手順においてである。手順が、研究にとって本質的な第二の性格を特徴づける。」<sup>12</sup>

数学的自然科学を念頭に置けば、この「手順」なるものは以下のような一連の工程として考えられるだろう。

「規則と法則という視圏のなかで初めて、諸々の事実はそれらが本来それである事実として明らかとなる。自然の範囲における事実研究は、それ自身において規則と法則を設定し確認することである。或る対象領域が表象されるに至る手順は、明らかなものに基づく解明すなわち説明の性格をもつ。(中略)説明は調査において実行される。調査は、自然科学においては、調査領野と説明意図の種類に応じてその都度実験を通して生起する。」<sup>13</sup>

他方、歴史学的精神諸科学においては、「資料批判」に基づいて、「了解されうるものが取り出されて計算され、歴史の見取り図として確証され、確定される。」<sup>14</sup>

こうした「企投」の展開は、学の特異化、個別化あるいは細分化を本質的にもたらす。

「学はすべて研究として或る限定された対象領域の企投にもとづいており、したがって必然的に個別学である。」<sup>15</sup>

最後に、学の「企業」性格について。

「近世の学は、第三の根本経過すなわち企業によって規定される。」<sup>16</sup>

ハイデガーも注記しているように、「企業」という語に軽蔑的なニュアンスを読み込んではいならない。「個々の対象領域が征服される手順は、単

純に諸成果を蓄積しない。手順はむしろ自らの諸成果の助力でそれ自身その都度新しい段取りへ向かう準備をする。」<sup>17</sup>

学の「手順」が、この「その都度新しい段取り」を追いかけまわす事態をつぎのようにハイデガーは言う。「手順は、手順それ自身によって開かれた段取りの諸可能性に対する準備をますます整える。このように、前進してゆく手順の諸々の方途となり手段となる自らの諸成果に対して、準備を整えておかねばならないことこそ、研究の企業性格の本質である。」<sup>18</sup>

こうした研究のあり方は、それに携わる人間のタイプをも変容させる。「静かな学識」あふれる「学者は消える」<sup>19</sup>。その代わりに、彼は「本質的な意味での技術屋の本質形態の周辺地域へと、自ずから必然的に突き進む。」<sup>20</sup>

学の「企投」は、「厳密さ」によって保証された「手順」において展開するが、「その都度の手順は企業のなかに据えられる。」<sup>21</sup>このことから、「企投と厳密さ、手順と企業は、交互に要求しあいながら、近世の学の本質を成し、学を研究にする。」<sup>22</sup>と結論づけられる。

### 3 「世界一像」

以上の「近世の学」の考察を土台にして、ハイデガーは「近世の学」の本質にひそんでいる「形而上学的根拠」を見定めようとする。「学が研究になるということ、存在者のいかなる把握と、真理のいかなる概念とが基礎づけるのだろうか。」<sup>23</sup>これら二つの観点からハイデガーの「表象」論を本論では追跡したい。

ハイデガーの「表象」論は次のことを最初に確認することから始まる。

「研究としての認識することは、表象すること (Vorstellen) にとって、存在者がどれだけ、またどの程度まで意のままにされ得るのかに関して、釈明を存在者に求める。」<sup>24</sup>

自然が対象である場合、未来の過程においてそれが予測可能であるとき、また歴史が対象である場合、過ぎ去ったものとして後から数えられるときに、学は存在者を意のままにする。

しかし、肝心なのは、自然であれ、歴史であれ「存在者のこの対象化はある表象することにおい

て遂行される」<sup>25</sup>点であり、「そのことの狙いは、すべての存在者を自らの前へ、計算する人間がその存在者について自信を持ちうる、つまり確信を持ち得るようにもたらすことである。」<sup>26</sup>

「近世の本質」を考える際、認識する人間の規定が中世的なそれとの対比の中で語られることが多い。しかしその際、「人間が在来の諸束縛から自分自身へと自らを解放することが、決定的なことではなく、人間が主観 (Subjekt) になることによって、人間の本質がそもそも変転するということが決定的なことである。」<sup>27</sup>こうハイデガーは言う。

「人間が第一の、そして本来の主観となるとき、このことは以下のことを言う。すなわち、人間が、一切の存在者がその存在とその真理との方式において、それに基づいているところのかの存在者になることをである。」<sup>28</sup>

「人間は存在者そのものの連繋中心になる。」<sup>29</sup>しかし、こうした人間本質の変転は、「全体としての存在者の把握が変転するときのみ可能である。」<sup>30</sup>とハイデガーは言う。

こうして、ハイデガーは主観性の問題から出発して、存在問題をもはらむ「近世の本質」論を展開する。

「全体としての存在者の把握が変転したことにしたがっていえば、近世の本質とは何か。」<sup>31</sup>

「われわれは近世を思い出すときに、近世の世界像 (Weltbild) について問うている。」<sup>32</sup>と断りつつ、ハイデガーは「世界像」という言葉の意味規定へと議論を進める。

「世界像はいわば、全体としての存在者の絵画である。しかし、世界像はそれ以上のことを言う。(中略) 像とはここでは単なる模倣を指さない。(中略) 事柄それ自身が、われわれに対してそうになっているような具合にわれわれの前に立っていることを意味する。」<sup>33</sup>

ハイデガーは「像」という語を含む慣用表現「われわれは或ることについて事情を心得ている、よく知っている (Wir sind ueber etwas im Bilde.)」を引き合いに出し、以下のような解釈を披歴する。

この言い方は「存在者がわれわれにそもそも表象されているということしか指さないのではなく、存在者はそれに属するものとそれの中に一緒

に集まっているものとの総体において、体系としてわれわれの前に立っているということを指す。(中略)世界が像になるところでは、全体としての存在者は、人間がそれに対する準備をし、それゆえに人間がそれに応じて己の前へもたらし、己の前に所有し、よって或る決定的な意味で己の前に立てようと欲するところのものとして、見積もられている。」<sup>34</sup>

したがって、当然のことながら、「世界」というものの成り立ちも表象作用との相関において語られる。

「世界」という「全体としての存在者は、いまや、表象しつつ製作する (vorstellend-herstellend) 人間によって立てられている限り、初めて存在者であり、またそのようにしてのみ存在者である。」<sup>35</sup>

以上から、近世における〈存在のテーゼ〉は以下のように定式化してよいだろう。「存在者の存在は、存在者が前に立てられていることの中で求められ、見出しされる。」<sup>36</sup>

ギリシア精神においては、人間は「存在者を受け取る者 (Vernehmer)」<sup>37</sup>と考えられたが、言うまでもなく、これと近世的な表象することとを混同してはいけない。「表象することとはここでは、直前のものを対立するものとして己の前へもたらし、己へすなわち表象する者へと向けて連繋させ、尺度決定的な境域としての己へのこうした連繋の中へ戻るように強いることを意味する。」<sup>38</sup>

repraesentatioの語は、したがって、「人間それ自身が、存在者が今後はその中で己を立てる、現前させる、つまり像であるのでなければならない舞台として己を据える」<sup>39</sup>こととして理解されねばならない。「人間は対象的なものという意味での存在者の代弁者 (Repräsentant) となる。」<sup>40</sup>

では、本節冒頭におかれたもう一つの論点、つまり「近世の学」を基礎づける真理の概念については、どのように言うことができるであろうか。

「表象するとはここでは、それ自身からして何ものかをそれ自身の前に立て、立てられたものを立てられたものとして確保することを意味する。このように確保することは、計算することではなければならない。計算され得るということだけが、表象され得るものに前もって不断に確信を抱くということを保証するからである。」<sup>41</sup>

ハイデガーの言い分がここで「非秘匿性」としてではなく、確信 (確実) 性としての真理の概念が、表象することとともに語られていることは明らかだ。さらに、デカルトの形而上学を踏まえただうえで、「主観」概念と「根本確実性」とを同一視し、ハイデガーは以下のように言う。

「主観、根本確実性とは、表象する人間が、表象される人間的なあるいは非人間的な存在者、つまり対象的であるものと共に、いつも確保されて一緒に表象されてある (Mitvorgestelltsein) ということである。」<sup>42</sup>

さて、ここで「世界像」という場合の「像」性格について再び確認しておきたい。

「世界像とは、本質的に理解されるならば、世界についての或る像ではなく、像として把握された世界を指す。」<sup>43</sup>

「像という語は今や、表象しつつ製作することによって形造られたもの全体を意味する。この形造られたもの全体の中で、人間は一切の存在者に尺度を与え、黒縄を張るところの存在者であり得る立場を求めて闘う。」<sup>44</sup>

「表象しつつ製作すること」によって「形造られたもの全体」とは、いいかえれば「一緒に並び立っていること、体系」<sup>45</sup>である。体系とは、「存在者の対象性の企投にもとづいて、自らを展開する、前に立てられたものそのものにおける構造 (Gefüge) の統一」<sup>46</sup>である。「体系」あるいは「構造の統一」が「像」というものである限り、それはもはや世界についての単なる或る「像」でないのは当然である。

また、ここで先に言われた「人間は存在者そのものの連繋中心になる。」<sup>47</sup>を思い起こそう。「連繋中心」であることからの帰結として、人間のあり方について以下のように論断される。

「人間の能力の領域を、全体としての存在者を征服圧迫するための尺度と遂行の余地として占領するという、人間存在のかの方式が開始する。」<sup>48</sup>

「かの方式」とは、これまで何度も指摘された、存在者を「把握、理解し」つつ「攻撃する」<sup>49</sup>こととも言い換えられるだろう。

#### 4 「表象 (Vorstellen)」から「集立 (Gestell)」へ 前節まで中期ハイデガーの「世界像の時代」に

おける「表象」論を検討してきた。これと書かれ公表された年代も、思考布置も違う「技術への問い」とを敢えて対照する理由は何か。それは「世界像の時代」の冒頭、「近世の本質的諸現象の一部をなす」ものとして「機械技術」が提示され、「近世の学」と同様に「機械技術」もまた「形而上学」に基づいてその本質が追究されなければならないというハイデガーの言及による。しかし、むろん問題は、単なる言及を超えて、「世界像の時代」と「技術への問い」との実質的な同一性と差異とを見極めることである。

後期ハイデガーに属する「技術への問い」を解釈するにあたり先ず注意すべきは、中期の「表象」論と一体となった「確実性」としての真理概念は破棄、乗り越えられ、「非秘匿性」としての真理概念がキーになっていることである。こうした真理論的問題構成において、「技術への問い」におけるハイデガーの問いは、「手仕事の技術」とは区別される、「機械技術」「原動機技術」に向けられる。問われるのは、近代技術はどのような本質の特徴をもつのか、という点である。結論先取していえば近代技術の「挑発 (Herausfordern)」がそれである。

近代技術は、それがτέχνηである限り、「開披」することではあるが、しかし、それはποίησιςの意味における「産み出すこと」ではない。

「近代技術においてはたらいっている開披することは、挑発である。この挑発は、それとして要求され、蓄えられうるようなエネルギーを供給するようにという、自然に対する不当な要求を突きつける。」<sup>50</sup>

「挑発」する近代技術に、ハイデガーは前近代の技術に属する「風車」を対置して、次のように言う。「たしかに、風車の羽根は、風のなかを回転する。風車は、吹く風に直接ゆだねられたままである。しかし、風車は気流のエネルギーを蓄えるために、そのエネルギーを開発したりはしない。」<sup>51</sup>

さらに、水力発電所についてのハイデガーの記述をみてみよう。

「水力発電所は、ライン河の流れのなかへと立たされている (gestellt)。この水力発電所は、水圧を供給するように流れを立たせる (stellen)。

この水圧は、回転するようにタービンを立たせる。この回転は、電気をつくりだす機械装置を駆り立てる。この電気のために、広域発電所と、電力輸送する供給網とが用立てられている (bestellt)。」<sup>52</sup>

水力発電所は、電気を得るために「ライン河の流れ」(自然)を「挑発」する。「挑発」をハイデガーは言いかえて、「立たせる働き (Stellen)」とも表現しているが、近代技術における「開披」のはたらきは、この「立たせる働き」という事態で性格づけられる。

もう一点、ここでハイデガー独特の用語に注意しておきたい。「挑発する開披」のはたらきに、いわば襲われ、その対象となるもの(先の例でいえば「ライン河の流れ」等)のありかたを、ハイデガーは、「用象 (Bestand)」と名づけている。

ここで「表象」論における人間という「主観」の「立たせる」働きを超えて、「技術への問い」においては、近代技術それ自身の本質である「挑発」が考えられている点に注目しなければならない。言いかえれば、「技術への問い」の問題性の布置では、「世界像の時代」におけるいわば〈主観性の形而上学〉という意味での「形而上学」は無効となり、「歴運」という新たな思考枠が設定されているのである。

さて、ハイデガーが近代技術の特徴を、「挑発しつつ開披すること」と捉えていることは、すでに確認した。ここでは、技術を利用する主体について検討することで、〈主観性の形而上学〉という意味での「形而上学」の審級が超えられていることを見きわめたい。

自然科学の研究対象たる自然が、「用象」として取り扱われる地点にまで追いやられるさまを、ハイデガーは以下のように述べる。

「人間が研究し観察しつつ、表象の一領域としての自然を追い立てるならば、人間は開披する一つの仕方によって、すでに呼びかけられている。この開披は、自然が用象という没対象的なものへと消えて行くまで、研究の対象としての自然に取り組むよう人間を挑発するのである。」<sup>53</sup>

ポイントは、第一に、自然の探究としての自然科学が、自然を「挑発」する近代技術にすみやかに接続していること、第二に、「開披」が人間を、

自然を「用象」として扱うよう「挑発」するということである。これら二つの論点から、「近代技術は単なる人間の行為ではない」が帰結する。技術の使用主体であるはずの人間自身が、「挑発」されているという点において、「近代技術は単なる人間の行為ではない」のである。

自然を「挑発」する近代技術は、自然を「挑発」するように人間を「挑発」する、この点を再度以下の文によって確認したい。

「それゆえ、私たちはまた、現実的なものを用象として用立てるように人間を立てるかの挑発を、それが現れるがままに受け取らなければならぬ。かの挑発は、人間を、用立てることの内へと取り集める。この取り集めるものは、現実的なものを用象として用立てることへ、人間を集中する。」<sup>54</sup>

この「取り集めるもの」、より正確に言えば「己れを開披するものを用象として用立てるように人間を取り集める、挑発する呼び求め」を、ハイデガーは周知のごとく「集立 (Ge-stell)」と名づける。

「集立は、かの立てることを取り集めるものである。この取り集めるものは、用立てるという仕方、現実的なものを用象として開披するよう人間を立てる。」<sup>55</sup>

ハイデガーはここで、近代技術の「本質」において統べる「集立」という「開披」の仕方を指示したわけである。

「集立」が人間を、現実的なものを「用象」として「開披」するようもたらす、すなわち、人間をそうした「開披」へと送り届ける。この送り届けるはたらきをハイデガーは「歴運 (Geschick)」と呼んで、次のように言う。

「集立は、用立てることへの挑発としての開披のひとつの仕方へと、(人間を) 送り出す。集立は、開披のあらゆる仕方と同様、歴運のひとつの送り (Schickung) である。」<sup>56</sup>

この「集立」には、しかし隠蔽性格がひそんでいる。それを次の文は明確に語っていよう。

「集立が支配しているところでは、用象の制御と確保とが、一切の開披を特徴づける。それどころか、この制御と確保とは、それらの固有な根本の特徴つまり開披そのものを、もはや出現させる

ことさえしない。」<sup>57</sup>

「開披」そのものを出現させないこと、これは「集立」が、「真理の現れと支配とをふさぐ」ことにほかならない。かくして、「用立てへと送り届ける歴運は、究極の危険である」<sup>58</sup>とハイデガーは言う。

ここに来て「世界像の時代」と「技術への問い」との非連続と連続とが明らかになったように思われる。「表象」論においては「主観」とその「確実性」とが論点をなしていたが、後年の～技術論においては「歴運」という枠組みのもと「非秘匿性」としての真理論的布置において、「集立」が主題となっている<sup>59</sup>。その限り、両者の間には思考枠組の連続はないように思われる。しかし、本論第1節で注意を払ったように、「技術の自立説」は後年の技術論をおぼろげに予感している。なぜなら、「技術の自立説」は技術をいわば自動運動と見なしていると考えることができ、これは「用立てるという仕方、現実的なものを用象として開披するよう人間を立てる」「集立」を先取りしていると考えられるからである。

## 5 結語—「目に見えない影」

「集立」は「ποίησιςという意味での、現前するものを現出へともたらす、かの開披を秘匿することであると表明する「技術への問い」は、当の「ποίησις」<sup>60</sup>を救い出すことで「究極の危険」を回避しようとする。では、「世界像の時代」の思考レベル、すなわち〈主観性の形而上学〉においては「近代の学」を突破する方途は残されていないのだろうか。

「補遺」の中の単なる示唆にとどまってはいるが、本論が着目するのは、「目に見えない影」へのまなざしである。「計画、算定、設備、保証の巨大なものが量的なものから或る独特の質へ急変するやいなや、巨大さすなわち外見上は徹頭徹尾、いつでも算定され得るものは、まさしくこのことによって、算定され得ないものとなる。」<sup>61</sup>この「算定され得ないもの」を、ハイデガーは「目に見えない影」<sup>62</sup>と名付けている。「真実のところ、影とは、秘匿された輝きのあらわな、しかし入り込み得ない証言なのである」<sup>63</sup>。したがって、この影は「表象から引き離されてはいるが、存在

者の中では明白であり、しかも秘匿された存在を暗示するもの」<sup>64</sup>として受け取ることができる。

表象には決して捉えられないもの、つまり「秘匿された存在」が残るという思考は、「近代の学」自身からはおよそ生まれない。その意味で、「目に見えない影」へのまなざしは、「近代の学」のおそらく手前、あるいはその彼方にある<sup>65</sup>。それを仮に「真正な省察」<sup>66</sup>と言うとすれば、これがハイデガー後年の「ποίησις」とどのような関係にあるのかという問題が当然のこと浮かび上がるであろう。だが、ハイデガー自身まだ「世界像の時代」においては、それと名指しした「ποίησις」の可能性についての言及はない。むしろ、この問題に対しては、本論では論究の範囲を超えるため取り扱いはできない「芸術作品の起源」に、その回答の手がかりを求めるべきであろう。

## 注

引用は略号とともにページ数を記す。

Martin Heidegger:Holzwege,Gesamtausgabe Band5.Vittorio Klostermann,1977.[H]

Martin Heidegger:Die Technik und die Kehre,Neske,1996.[T]

[ ]は引用者による補い。

<sup>1</sup> 絵画を見るという行為は、ハイデガー「芸術作品の起源」(1935/36年)の思考に基づいて、存在者の「真理生起」を経験することとすることもできよう。が、ここではもっと一般的に分かりやすく表現した。

<sup>2</sup> 「中期ハイデガー研究(1)」「芸術作品の起源」における芸術の概念」(弘前学院大学文学部紀要44号、2008年3月)参照。

<sup>3</sup> H S.94

<sup>4</sup> ebd.

<sup>5</sup> H S.75

<sup>6</sup> ebd.

<sup>7</sup> H S.77

<sup>8</sup> ebd.

<sup>9</sup> ebd.

<sup>10</sup> ebd.

<sup>11</sup> H S.79

<sup>12</sup> H S.79,80

<sup>13</sup> H S.80

<sup>14</sup> H S.82,83

<sup>15</sup> H S.83

<sup>16</sup> ebd.

<sup>17</sup> H S.84

<sup>18</sup> ebd.

<sup>19</sup> H S.85

<sup>20</sup> ebd.

<sup>21</sup> H S.86

<sup>22</sup> ebd.

<sup>23</sup> ebd.

<sup>24</sup> ebd.

<sup>25</sup> H S.87

<sup>26</sup> ebd.

<sup>27</sup> H S.88

<sup>28</sup> ebd.

<sup>29</sup> ebd.

<sup>30</sup> ebd.

<sup>31</sup> ebd.

<sup>32</sup> ebd.

<sup>33</sup> H S.89

<sup>34</sup> ebd.

<sup>35</sup> ebd.

<sup>36</sup> H S.90

<sup>37</sup> H S.91

<sup>38</sup> ebd.

<sup>39</sup> ebd.

<sup>40</sup> ebd.

<sup>41</sup> H S.108

<sup>42</sup> H S.109

<sup>43</sup> H S.89

<sup>44</sup> H S.94

<sup>45</sup> H S.100

<sup>46</sup> ebd.

<sup>47</sup> H S.88

<sup>48</sup> H S.92

<sup>49</sup> H S.108

<sup>50</sup> T S.14

<sup>51</sup> ebd.

<sup>52</sup> T S.15

<sup>53</sup> T S.18

<sup>54</sup> T S.19

<sup>55</sup> T S.23

<sup>56</sup> T S.24

<sup>57</sup> T S.27

<sup>58</sup> T S.31

<sup>59</sup> 「存在史の観点」と言い得るかもしれない。

<sup>60</sup> より根源的な「開披」、すなわち「真理を現れ出るものの輝きへのうちへ生み出す、かの開披」(T S.34)という意味。

<sup>61</sup> H S.95

<sup>62</sup> ebd.

<sup>63</sup> H S.112

<sup>64</sup> ebd.

<sup>65</sup> 「将来の人間」は「かの算定されえないもの」(H S.96)を知ることになるだろうと、ハイデガーは予言している。

<sup>66</sup> H S.96